
最弱勇者レベル100

チチルチルチル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最弱勇者レベル100

【Nコード】

N9871Y

【作者名】

チチルチルチル

【あらすじ】

アルカリス学園。世界で唯一の、魔王を倒し世界に平和をもたらす勇者を育成する為に作られた学校である。

そんなアルカリス学園に入学しようとした少年、トウヤは街中で一人の少女と出会う。
少女は言う。

「あんた　魔王でしょ？」

元魔王の少年と変な少女達＋ が送る『勇者育成学園ストーリー』。

ブローグ

その日も、何も変わらない日だった。

いつものようにダラダラと過ごし、いつものように妹を可愛がり、いつものように何もしない。

それが少年にとっての日常であり、この世界のあるべき姿だった。良く言えば平穩、悪く言えば何も無い。

退屈で怠惰で刺激の無い、楽しい日々だけがそこにはあった。

ある……はずだった。

辺り一面を血が覆い尽くす。もともと赤かったはずの絨毯も、血で更に赤く黒く染み付いている。

絨毯の上には原型もわからないほどに切り刻まれた何かの肉塊が積み重なっている。

古い建物独特の湿っぽい匂いや、それを誤魔化す為の香水などの匂いは既になく、鼻にツンと来る血の匂いのみが充満していた。

数時間前までは古いながらも極普通の建物だった。そこにいた者は皆笑い合い、冗談も交えながら談笑していたはずだ。

そんな皆が今は、どうして！

「いい加減諦めたらどうですか？」

少年の意識が強引に現実へと引き戻された。

今いるのはある部屋の中心。辺りを血や肉塊、そして一人の男と

それに付き従う者達に囲まれている。各々の手には剣や斧など、誰かを殺傷する為の武器が。

男は年齢30代ほどで、黒を基調とした神官のような儀礼服を身に纏っている。鎧ばかりの中で一人だけそんな格好をしてるものだから、自分が指揮官だと言ってるようなものだ。

対する少年は一人。

武器である剣は真ん中からポツクリと折れ、とても戦える状態では無い。その腰には鞘に収まったままの刀があるが、今この状況では使えない。

絶体絶命のピンチ。常人ならば現状に絶望しガムシヤラに足掻くか、諦めてその先に待つ未来を受け入れるか。どちらかを選ぶかもしれない。

だが、少年には絶対に生き延びなければならない理由がある。世界の王として、一人の兄として。

今この命を散らすわけにはいかない。

「貴方ともあろう方がこの様。既に貴方の時代は終わったのですよ？」

「……ハッ！ とか何とか言いながら俺はまだピンピンしてるぜ？ 多対一なのに余裕な俺の時代が終わるわけ無いだろ」

嘘だ。

刀は既に折れ、その体には致命傷は無いものの小さな傷が無数に刻まれている。体力も限界に近く立っているのがやっと。魔力も底を尽き最後の足掻きすら出来ないのが現状だ。

それがわからない男ではなく、少年もそれをわかっている。

「……見苦しいですね。いい加減、終わりにしましょうか」

男が右手を天へと向けるようにあげる。周りにいたその部下達は一斉に武器を構え、いつでも少年を襲える体制になる。

少年の体を冷や汗がツーツと流れ落ちて行く。

こんな所で死ぬわけにはいかない。何としてもここから逃げ出さなくちゃいけない。決して、生きる事を諦めたわけでは無い。諦めたわけでは無い、のだが……。

「……仮にこのまま俺を殺せたとしても、王族を討ったお前に従う者はいないぞ」

自分の死後を考えてしまう。

その言葉は男に対する最後の武器、最後の抵抗だったのだが、それはつまり自分の死を半ば受け入れてる事に他ならなかった。

ただ、それでもこの武器は強力な威力を秘めている。

王である少年を討ち、全く関係の無い者が王を名乗れば当然ながらそれに付き従う者達から反感を買う。最悪、そういった者達に今度は自分がやられてしまうかもしれない。

したり顔をする少年だったが、男は表情を一切変える気配がなかった。

……いや、微妙ながらその顔に表情が浮かんでいた。それは、どうしようと言った焦りではなく、気づかなかった事への戸惑いでもなく、苦し紛れの怒りでもなく、

少年に対する嘲りだった。

「……何か勘違いをなさっているようです。私は貴方を殺して王になろうとしてるわけではありませんよ」

「……なに？」

カツカツと、靴の音を鳴らしながら男は少年の方へと歩く。
自分にとって最後の武器を使ったにも関わらず、余裕な態度を崩さない男に懐疑的な視線を向ける。

「なぜなら、王になるのは別の方。貴方と同じ、王族の血を受け継ぐ方なのですから」

「……っ！！」

貴様、まさか……！？」

「ようやくご理解いただけましたか」

そこでニツコリと微笑んだ。

少年にとってそれは死を呼ぶ死神よりもずっと恐ろしい、自分の生死などどうでもよくなるようなものだった。

先ほどに比べ尋常じゃ無いほどの汗が流れ落ちていく。一滴、また一滴と。

滴り落ちる音が男の足音と重なり、感覚を狂わせて行く。視界がボヤけ、平衡感覚もいかれて足がふらついている。カラン、と握っていたはずの折れた剣が落ちる音が聞こえる。思考も定まらず、自分が今何を考えているのかさえわからない。

そんな少年の前に、男が立つ。

その手には細身の剣が握られており、切っ先を少年の胸
心臓
へと合わせる。

「貴方亡き後、空位となった魔王の座を継ぐのは貴方の妹君であらせられるリーン様です」

「さようなら」とニツコリ笑い、肉眼では捉えられないほどの神速の剣がハクトウリーヤの胸を貫いた。

おびたらしい量の血が噴水のように周囲に溢れ、血で汚れた床を更に血で汚して行く。

最初は感じた痛みも段々と失われて行き、熱さと寒さが一緒になって体を襲う。

そして、力が入らなくなり、スルリと零れ落ちる様に倒れ伏した。

こうして、魔王の少年　ハクトウリーヤは死んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9871y/>

最弱勇者レベル100

2011年12月1日22時53分発行